Network & Footwork

有限会社メディアハウスエイアンドエス Vol.31

•あけましておめでとうございます

A Happy New Year!

昨年末に鹿児島を訪れる機会があった。そのときに見たり、聞いたりしたことを書き留めて置きたい。

○串木野にある金山資料館の展示によると鹿児島にはいまも採掘している金山が５つある。現役の金山は日本では鹿児島だけ。すでに閉山になってしまったものも含め、鹿児島は多くの金を産出し、その金が江戸時代の薩摩藩の財政難を救い、明治政府の金庫を支えた。
資料館の人の説明によると、金の累積産出量は鹿児島の今も採掘が続く菱刈金山が全国一位、二位が佐渡金山で、四位は串木野とのこと。
　大正に日本最大の産出量を誇った串木野金山の一部は、今、濱田酒造が焼酎を仕込み貯蔵する蔵として使っている。その地下坑道を使った仕込み蔵にトロッコで入っていくことができる。七百メートルの坑道をゆっくり進んでいくと、かつて数千人が関わった金山の坑道に、今は焼酎の甕たちがひっそりと眠る。

○錦江湾にそびえる桜島。今も多い年には九百回以上噴火し、標高1,117　メートルながら一般の人が立ち入りできるのは373メートルの高さまで。近年最大の噴火は、今から100年ほど前の大正のもので、そのとき桜島は大隅半島とつながって島ではなくなり、火山灰は北海道と東北地方北部を除く全国に届いた。
　その桜島の頂上まで登ることができた時期がある。年配の鹿児島の人のなかには、子どもの頃に遠足で頂上まで登り、ボール遊びをした人もいる。大正の噴火でエネルギーを一気に吐き出したからだろうか。現在は誰も足を踏み入れることができない頂上から、かつての子どもらはきれいな景色を見た。鹿児島市内の銭湯はすべて温泉で、今は390円で温泉の湯に身を浸しながら桜島の勇姿を仰ぎ見ることができる。

○鹿児島中央駅で新幹線を降りると、駅前にある十七人の銅像が目に入ってくる。幕末、幕府に秘密で英国に留学した、後の初代文部大臣森有礼や大阪商工会議所初代会頭五代友厚を初めとした若者たちだ。彼らは藩命によって鹿児島城下を立ち、串木野に二か月ほど滞在したのち、英国商人トーマス・グラバーの手配した船でロンドンに向かった。船出の浜に、今は「薩摩英国留学生記念館」が立つ。
　十七人のうち日本に戻ってこなかった者が一人だけいる。最年少十三歳で渡英したその人長沢鼎は紆余曲折を経てカリフォルニアに移り、そこで一大ぶどう農園を拓いて、カリフォルニア州10大ワイナリーのひとつに育て上げ「ぶどう王」と呼ばれる。展示館に農園を訪れた発明王エジソンと一緒に映った写真があった。
　後年、彼はカリフォルニアの地で親戚に「普通の人であれば気が違うほど悩みを抱えた」という主旨のことを述べた。農園の執務室には薩摩の剣術示現流の木刀が置かれ、執務室の外まで素振りの音が聞こえてきた。
　薩摩の武士は文明開化で変わっていく日本を見ることなく、遠くカリフォルニアの地で何を思い、木刀を振っていたのだろう。

■高橋の取材ノートから

昨年お世話になりました関係者に心からお礼を申し上げます。本年も変わらぬご支援をお願い申し上げます。

◎社史・創業者伝

「創業精神の相続」
http://takahashi-akiyo.jp/
○昨年9月あるお客さまの50年史（非公開）の出版をお手伝いしました。

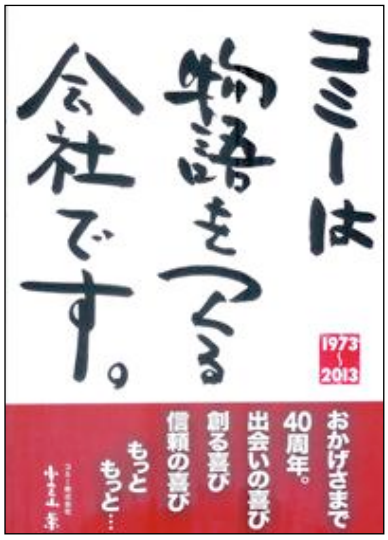
○進行中：昨年春からあるお客様の50年社史が、また昨年暮れから別のお客様から40年社史がスタートし、それぞれ今年秋の完成予定に向けて進行しています。

◎印象に残った書籍

○『コミーは物語をつくる会社です 1974～2013』
(発行：コミー株式会社
代表取締役　小宮山栄様　非売品)

お願いして上記のコミー株式会社の40年史を分けていただいた。この書籍は非売品で、希望者に配布された。本書はA4版　本文333ページの大著である。

本書がユニークな点はいろいろあるが、巻頭ページのグラビアには失敗に学び、そこから生まれた新製品が掲載されている点であろう。収録内容の多くは、同社のホームページにも掲載されている。
http://www.komy.co.jp/story/



○『なぜローカル経済から日本は甦るのか』
(冨山和彦著　PHP新書)

地方活性化が言われて久しい。政府はようやく地方創生で予算をつけるという。しかし、実際には地方で地道に活性化に取り組み成果を出している地域は少なくない。昨年末ＮＨＫのTVで放映され、ご覧になった方も多いと思うが、飛騨高山では海外から観光客を呼んで成果をだしていると放送された。

飛騨高山では、京都や奈良などとは一線を画した人々の日常生活がこの観光ツアーの中心だ。高山の朝市や飛騨での米の収穫、酒米の学習、ラッピングでは外国からの観光客が自分の名前をのし紙に書く習字など、体験型観光、スローツーリズムである。

地方活性化や地方観光は、いまや地域の資源や伝統と知恵を活かした個性を競争する時代に入った。

本書は著者の地方での実績をもとに書かれているが、決してグローバル経済の動きを否定していない点も含め、手堅い内容となっている。

○『永続敗戦論　戦後日本の核心撃』
(白井聰著　太田出版)

今年2015年は戦後70年を迎える。著者のスタンスは「終戦」ではなく「敗戦」と改めて位置づけること。戦後日本政府が締結したアメリカ、ソ連（ロシア）、中国（台湾）、韓国との条約内容、あるいは沖縄をめぐる歴代の政府の方針をひもとき、その意味をていねいに検証しているなど濃い一冊である。読者によっては、内容に異論もあると思われるが、戦後70年を考える上で読んでおきたい一冊。

○『「空き家」が蝕む日本』
(ポプラ新書　長嶋修著)
『空き家問題－1000万戸の衝撃』
(祥伝社新書　牧野知弘著)

2冊とも「空き家」問題をテーマとしている。日本では人の高齢化の進展と共に家も高齢化が進展している。地方で「空き家」が目立ってきただけでなく、都市や首都圏でもこの問題が深刻化している。2040年、10軒に4軒が空き家になる時代が来るという。後者の著作はその解決策も論じている。

◎My Family History（ブログ）

昨年、このブログを再開したいと表明したが、残念だが果たせなかった。お正月休みに原稿執筆から、再スタートをしたいと思います。ご了解ください。

最後になりましたが、
今年もよろしくお願いします。

有限会社メディアハウスエイアンドエス
〒108-0071
東京都港区白金台3丁目16番10-709号
PHONE （03）3449-0785
FAX （03）3449-0736
m-hmail@nifty.com
http://www.m-h.co.jp/